

現場監督に指示し、日本人の熱心な作業ぶりを高く評価する。そして技術もすばらしいと評価し、表彰せよと指示して帰ったと監督より伝えられ、パーセントは四七％で現場で初めての表彰グループとなり、監督の信用も厚く、私は左官の監督と認められ、素人左官の日本人として恥じることもなく、十三人は苦勞の甲斐があったと喜び合った。

そしてでき上がった四階建てのアパートには次々と入居人が増すという。ナホトカ収容所での苦勞と喜びを残して、二十三年五月元日、日本帰国の命令が出た。収容所全員でなく、私はナホトカ港に出て、迎えの永徳丸に乗船した。船内の皆様も歓迎してくれた。そして給与で白米のご飯のおにぎりが配分され、四年ぶりのお米の味は格別であった。

そして、東舞鶴港に上陸した。多くの出迎えを受け、収容所に入った。いろいろと検査を受け、五月九日、郷里帰宅となり、舞鶴駅に出た。駅には婦人部外多くの方の熱き歓迎を受け、列車に乗った。京都、大阪駅での歓迎ぶりは本当に感謝した。高知駅でも世話課の方、婦人

部の方の歓迎と、そのご厚情を思い出として帰宅という、よくぞ生き抜いたシベリア抑留、苦勞の四年の思い出を書き終わる。

生地獄シベリア抑留

和歌山県 南 口 佐 一

ソ連は自分の国の再建のためか、一九四五年から五年計画で、日本兵をシベリアに送り、ノルマ制で作業をさせて食事も事欠き、乏しくて丸一日何もないときも多々あった。この世の地獄を、真実ありのままにその実態を書いてみたいと思う。

当時、満州には兵員はいたが、武器弾薬はなく、若い現役兵は少なく、四十歳から五十歳くらいの老補充兵が多く、小銃も帯剣すらも支給されず、竹の水筒であった。私も八面通の飛行場の挺身隊員で訓練を受け、兵一人に戦車一台という体当たり戦法であった。すなわち爆薬を背に飛び込みする練習だ。

また、飛行機の翼に带状火薬を巻きつけ、爆破する等の教育を受けていたが、八面通からの移動が始まり、横道河子の町まで逃げるのに夜昼の別なく歩き続けること約二百キロ。当時二十歳であった若い私でも、苦しい行軍であった。

開拓団の女の人が幼な子を背負い四、五歳くらいの子供の手を引き、物を持ち逃げしていく。また、あのときの人たちは生きて日本に帰つただろうか。我々兵隊を頼りにしてか、兵隊さん兵隊さんと叫びながらついて来ていた人たち、今そのときのことを思い出すとゾッとする。まさに地獄の姿とは、あのさまを言うのではないだろうか。夜、幼な子が泣けば、ソ連兵にわかるから殺せと、そんなことを今の人たちは言うだろうか、するだろうか。これは本当にあったことだ。

私たちは八月十八日ころに横道河子という美しい町で終戦になった。

それから後、また移動しなければならなくなって、行先のわからないままの行軍だ。わけのわからないままに着いた所は、牡丹江近くの拉古という町。今日になって

もその町の名は地図では表されていない。この町で私たちの「ダモイ東京（日本へ帰る）」という大隊編成がなされたということであるが、実際はソ連の復興五か年計画の作業大隊の編成であった。

私たちはそれからアメリカ製の自動車に二十人ぐらいずつ乗せられて、東に向かい綏芬河を通り、ソ連に入つたわけであるが、当時は知るよしもないことであった。連れていかれるままで、着いた所は興凱湖の畔であった。初めは日本海かと思った。そのときは喜びの気持ちもあつたが、その夢は覚めて、水は淡水であるを知り、湖であるを知つた。

テントを張り、幕舎づくりだ。翌日から作業にかかると。朝、自動短銃を持ったソ連兵に鎌と砥石を一人に一個ずつ手渡された。刀の長さは四十センチぐらい、柄の長さは二メートルぐらいで、日本の鎌の大きいのに似ていた。それで草をなぎ倒していくので、二メートル幅で刈り取られてゆく。東北出身の人たちは上手であった。

砥石といえば我々の感覚と異なり、コンクリートで固めた「五センチ×二十センチ」厚さ三センチぐらいのもの

のに過ぎないものだ。このようなことでノルマを求めて仕事を強制するが、与える食事はまことに粗末そのもの、実際のものより少ないもの、五十〜七十パーセントの量より支給されなかった。

食事の分配は、明日の昼食は前日の夜に。置いておけば、飢えた者たちばかりだから、盗んでしまふ。このようなことの繰り返しだ。盗まれないために夜に食べれば明日の昼飯はない。実際は三百グラムあるものが、与えられる量は二百グラムよりなかった。朝晩の支給は約八百ミリリットルの缶詰と小豆かコーリヤン、五十粒くらいと鮭と米糠のスープであった。

これが通常の一日の食事だった。本当にソ連より支給されるはずと聞いた数字は「穀物二百グラム、パン三百グラム、肉百グラム、油十グラム、砂糖一八グラム、塩魚」とあった。それが私たち日本兵には半分くらいしか与えられなかった。

その当時、だれ一人として洗濯したり顔を洗ったりする者はなかった。

約百二十人ほどで九月ころまで草刈りをやらされた。

その目的は何であったか私たちにはわからないが、二十日ころまでにその仕事を終え、秋の気配も知らず、寒さの深まるころ、ダモイ東京だとだまされて、トラックに乗せられた。どこへ行くのかわからない不安の心のまま、悪路をトラックにゆられていった。

ふと気づいたことは、興凱湖畔から北に向かい、元いた陣地附近の迫撃砲兵舎のそばを走っているではないか。それから密山の病院近くを通過し、私の入隊した密山の六三四部隊の前を通っているではないか。胸に迫る懐かしさでいっぱいになる。たまらない気持ちだった。兵舎も病院もそのまま残っていたので、むしろ不思議に思えたくらいで、びっくりしたことは、当時の私の実感と言える。

それからさらに東安の街を過ぎ、虎林を通り、虎頭に着いた。この地でどのくらいいらされることやら、ウスリー江が目の前をととうと流れている。二キロほど先がソ連のイマンの街だという。この虎頭は大変な激戦地であったと後の日に聞いたが、私たち連れていかれた百二十人ほどの者は、日ごと船への積み込み作業。

何を積み込まされたかと言えば、戦利品ばかり、武器弾薬はなかったが、食料や甘味品、被服等、日本軍や中国からの物凄じばかりの量の物資であった。砂糖、酒、煙草、羊かん、乾パン、米、麦、大豆、机・椅子、建具、ガラス、畳にいたるまですべてをソ連領内に持ち込んでいった。

この積み込みの期間中は、大っぴらではないが、お蔭で私たちは適当に栄養もとることもでき、被服も持って大助かりであったが、その虎頭での作業も半月余りで、またしてもトラックに分乗させられて、元来た道を行続けた。移動のあるごとにダモイ東京、ダモイ東京といわれ続けてきたけれども、着いたところは、それからの生活が証明するように、悪魔のハストリハンカ収容所であった。

ここでは昼夜の別なく石炭の積み下ろし作業が多く、食事状態は非常に悪い。収容所は馬小舎を改良し、二階にしたようなもので、丸太を並べ枯草を敷き、寝る場所は一入五十センチもない。通路の中にドラム缶を置いて暖をとるようにたたくことになっているが、これを燃やす

と、一階は寒帯、二階は熱帯となり、空気は乾き、着の身着のままの衣類には、身ぶるいするほど物凄じくシラミが繁殖して、体中シラミに食われ、肌は松の皮のようにガサガサ、入浴することもない。泥水に肌をぬらせば、丸太を漬けたも同様になる。気持ちの悪さはたまったものではない。

このような状態でも、仕事に追い回され、散髪もできない。頭にもシラミが、仕事から帰れば石炭で真っ黒になった顔を洗うこともできず、目は血走り、ガツガツと食事を済ます。少ない食料ゆえに、アツという間になくなる。その後はただ眠りたいだけである。

しかし空腹のために、泥んこのように眠るのは束の間で、すぐに目覚めてしまう。それも夜昼なしの現象で、生活そのものが悪循環であるため、次第に体力が消耗していった。まことにひどい事実の話になるが、餓鬼道の極限ともいうべき人間の哀れな行動として、道端で死んだ猫を持ち帰って料理し、内臓の一切れも残さず食べるのである。野ネズミなどは上食であった。

みじめで哀れな姿はまだまだある。昔日本にもいたこ

とあるルンペン以上の行動を實際にやって、食べ物となりそうなものすべてをあさり歩く。よろよろとした弱り切った自分たち同僚の姿、このようなことを今の時代の人たちは本当に信ずるだろうか。今から四十年前まであったソ連領内における日本人捕虜たちの姿であることを、私は事実であることを証言する者だ。

ソ連のドクトルは身体検査のときに、我々の腹の皮をつまんで引っ張って、ABCに健康状態のランク分けをする。それによって仕事を割りふられる。栄養失調など頓着なし。鳥目になっていても何の考慮もされない。

この収容所で私が実感として感じたことは、シラミが人間の死期を教えてくれるということだ。死期の近づいた戦友の首筋に、今まで体内にいたシラミが続々と這い出てくる。それはおびただしいもの、血がうまくなってきたからか、体温に張りがなく冷たくなってきたためか、そんなとき、戦友は起きてこない、死んでいるのだ。それは時を定めない当時のハストリハンカ収容所の現象であった。

その死んだ戦友を毛布に包み、引きずって戦車壕に埋

める。一月から四月までは極寒期だ。凍りついて掘ることもできず、そのまま雪をかぶせて置いたが、その後どうなったことやら、私たちが移動したときも気がかりなことであった。実際、昭和二十年十月から翌年四月ころまで、私たち約三百五十人の作業隊員中、八十人もの大量の死者を出している。しかもそれらは私と同じ若き初年兵に多かった。極寒の地での重労働と、食乏しく、医療、衛生観念の欠如と言わざるを得まい。

私の知る範囲でも、同郷の人として三人、長野県の一人が死んでいった初年兵の方々だ。今も毎日の回向は忘れない私だ。この収容所での事件が契機となり、その後のソ連側の対応は少しずつ改良されていったようだ。

しかし、当時このハストリハンカ収容所で働かされた人間として、私が「生き地獄のシベリア抑留」としたのは、特にこの時期のことを痛切な意味として述べたものであるが、昭和二十三年七月下旬、舞鶴帰還までのその後は、ソ満国境、虎頭陣地の対面、イマン市附近に極東鉄道を北上して、ラゾという部落に移動、農作業や建築作業、石採り作業、時には伐採など、この附近を転々と

して約二か年の歳月を過ごしたことになる。

今、この手記を終わるに及び、あのハストリハンカ収容所の戦車壕に埋葬することもできず、極寒の地に雪をかぶせて埋めてきた戦友たちの遺族の方々に何と申し上げてよいやら、その言葉もない。亡友よ安かれと心から祈るものである。

飢えと寒さの苦境から免れ

満三十年を記念して

和歌山県 松本 安次郎

四〇一二部隊

関東軍とかつては誇っていたあの精銳部隊も、昭和十九年ころより逐次その影をひそめ、南方の応援及び国土防衛等で満州より引き揚げと聞く。

ソ満国境を流れるウスリー江（江幅約一キロ）を隔てて、煙突の高さでは東洋一といわれるイマンの街（推測三十万の人口）を目前にする満州最東端の町虎頭の一角

に構える我が四〇一二部隊。初代隊長北田政治、十九年中山甚七郎に引き継がれ、二十年の年明けとともに転属、配属と回を重ね、三月ころ遼南の方に転属される約三十人ほどの中に松本が含まれていた。

工兵隊

満州国第七十九旅団即成混成部隊工兵隊、隊長陸軍大尉堺省三、当時隊長当番をしていた松本に向かって、「煙草はどうか、足りるか。」と聞く。「足りないです。」と答えると、「内地では三本くらいしか吸えないぞ。」と。そのころ、兵には一日七本くらいである。

何事もなく歳月が過ぎ、やがて夏が訪れるころ、満州の日本軍が集結して大演習が始まるとうわさが出た。

遂にその日が来た。完全武装（約四十キロ）を身につけて、約五十キロの行程は強行軍であった。目的地に到着して見ると、驚くばかりの大勢でその数幾万か。

我々工兵隊の目的は、山に登って穴をつくるにある。

岩の質は内地で見るとみかげ石と全く同じで固く、鎚を振うになかなかはかどらない。作業は昼夜交替で行なわれた。たまたま通りかかった満人は我々の作業を見て、